



122-AX

1950年代初期にハイエンドユーザー向けに開発された高性能 2ウェイ・コアキシャルユニットで、イームズがデザインを手がけた最初機の E-1、E-2、E-4 にも採用されている。112-FR フルレンジの中央に 212 トウイターをマウントさせた2ウェイ・コアキシャルユニットでネットワークには2μのコンデンサー入っている。フルレンジの30cm ユニットと5,000Hzで低域をローカットしたT-212 トウイターで駆動されていて、とても薄くて張りのあるカーブタイプのコーン紙の特性の良さが非常に良く生かされている。



Model-620

前ページの Model-622 システムのスクエア箱タイプで、1940年代後期から生産されたモデル。こちらも厚さ12mmの米松合板で造られており内部構造も Model-622 同様のスリット型のショートロードが採用されている。後ろ面パッフルが1枚板なのでこちらが共鳴して低音再生がより豊かな感じを受ける。

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのヴィンテージオーディオ

ヴィンテージといえば、アルテックやタンノイなどが誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べる、他の多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。ビンテージ・ショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのヴィンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。今号ではアメリカ、カリフォルニアに設立されたスピーカーブランド、トゥール・ソニックの1940年代に生産された 30cm ユニット搭載モデルをオリジナルボックスとともに紹介しよう。

本文 / 田中伊佐資

製品解説 / 岡田圭司(アトリエJe-tee代表) 撮影 / 小林幹彦(彩虹舎)



Model-622

1940年代に生産された 30cm ユニット搭載モデル。コーナータイプで厚さ12mmの薄い米松合板で造られており、内部構造は Tru-sonic がよく採用するスリット型のショートロードになっている。低音は量感もありながら切れの良い再生音を可能にしている。こちらは初期モデルで正面にアールデコ調の真鍮の飾りが美しい。

第45回 Stephens/Tru-sonic

Stephens 社は1941年にロバート・ステフェンスによりアメリカ、カリフォルニアで会社が設立され、Tru-sonic のブランド名でスピーカーをメインに販売していた。設立前はJ.B.ランシングと共に映画館用の大型スピーカーシステムを開発しており、設立当時はプロ用スピーカーメーカーとして良く知られていた。50年代に入ってアメリカで家庭用オーディオが大ブームとなり、stephens 社はコンシューマーのハイエンドユーザーのためのスピーカーを主力として開発するようになる。この頃からフレーム塗装がカリフォルニアの青い空のようなブルーに変更され、当社特有の明るく澄み切ったサウンドと良くマッチしています。

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

Stephens/Tru-sonic / Model-622



112-FR

1940年代後期に開発された30cmフルレンジユニットで、コーン紙は P-22FRと同じタイプの薄いカーブコーンタイプが使われている。先代の P-22FRよりマグネットが少し小さくなっていて、アルミのセンターキャップが採用され、高域再生を助けている。



P22-FR

1940年代に生産された30cmフルレンジタイプユニットで、38cmユニットと同じサイズのマグネットを搭載。ユニットセンターにはアルミ製の円錐形デフューザーが装備されている。スタジオなどで小型モニター用スピーカーとしても当時使われていた、とても生産数が少ないモデル。このユニットに採用されているコーン紙はとても薄くて張りがあり、当時から現在までアメリカで製造された数ある 30cm ユニットの中でもこのコーン紙ほど軽量で響きの良い物はない。



T-212 / X-5000

黒いプラスチック性の丸いホーンにアルミ製のダイヤフラムを搭載したトウイター。X-5000 ネットワークで5,000Hzから15,000Hz くらいまでの帯域までを受け持ち駆動する。

僕が愛用するモノラル用スピーカーはジェンセンの15インチユニットを同社CA-112エンクロージャーに入れたもの。5年前に岡田さんが見繕ってくれた。型番からしてこのエンクロージャーは12インチで使うのが本来だろうから、いずれはこのサイズの同軸で鳴らしてみたいなあなど思っている。15を知ったからこそ、トウイターとつながりがいい12の良さがわかった。そこで、いつものように取寄せて詳しくテーマを訊かないまま店に入ると、まさにその12インチ同軸ユニットがでんと置いてあるではないか。岡田さんはそれを見ながら「トゥール・ソニックの122Xです。これがペアで揃ったので純正エンクロージャー16200に入れてみました。きょうはそれを聴きます」と言っていて、そのユニットを手に取り、コーン紙を指で軽く撫でた。パリッと擦れる音がした。張りがあって乾燥しきっている感じがそれだけでわかる。間違いなく感度がいいはずだ。「50年代のユニットでは最軽量ではないですか。今ではもう作れる人がいない職人技ですね」と付け加えた。まずはデヴィッド・ブルーベック・カルテットの「タイム・アウト」から「ザ・ストレンジ・メドウ・ラーク」がかかる。このアルバムが出てくると自動的に「テイク・ファイヴ」に遭遇するパターンが

僕が愛用するモノラル用スピーカーはジェンセンの15インチユニットを同社CA-112エンクロージャーに入れたもの。5年前に岡田さんが見繕ってくれた。型番からしてこのエンクロージャーは12インチで使うのが本来だろうから、いずれはこのサイズの同軸で鳴らしてみたいなあなど思っている。15を知ったからこそ、トウイターとつながりがいい12の良さがわかった。そこで、いつものように取寄せて詳しくテーマを訊かないまま店に入ると、まさにその12インチ同軸ユニットがでんと置いてあるではないか。岡田さんはそれを見ながら「トゥール・ソニックの122Xです。これがペアで揃ったので純正エンクロージャー16200に入れてみました。きょうはそれを聴きます」と言っていて、そのユニットを手に取り、コーン紙を指で軽く撫でた。パリッと擦れる音がした。張りがあって乾燥しきっている感じがそれだけでわかる。間違いなく感度がいいはずだ。「50年代のユニットでは最軽量ではないですか。今ではもう作れる人がいない職人技ですね」と付け加えた。まずはデヴィッド・ブルーベック・カルテットの「タイム・アウト」から「ザ・ストレンジ・メドウ・ラーク」がかかる。このアルバムが出てくると自動的に「テイク・ファイヴ」に遭遇するパターンが

奇跡のペアが導く底知れぬ魔力
純正エンクロージャーで堪能する